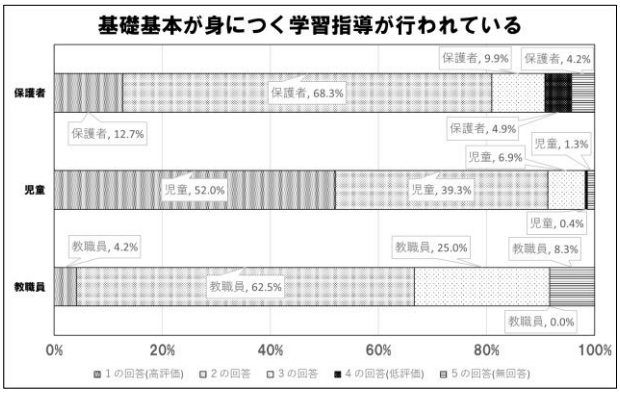
令和６年３月
横浜市立希望ケ丘小学校
校長　山本　美和

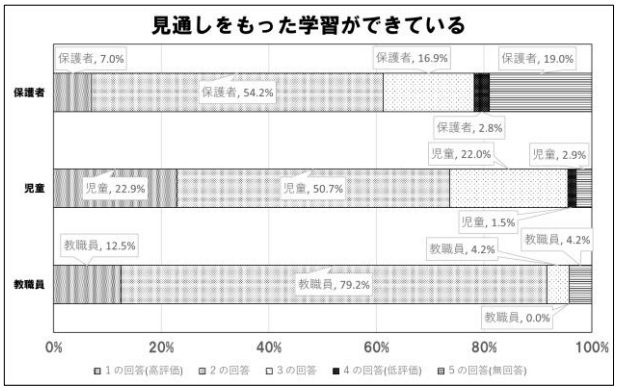
令和５年度　学校評価　結果と今後の取組について

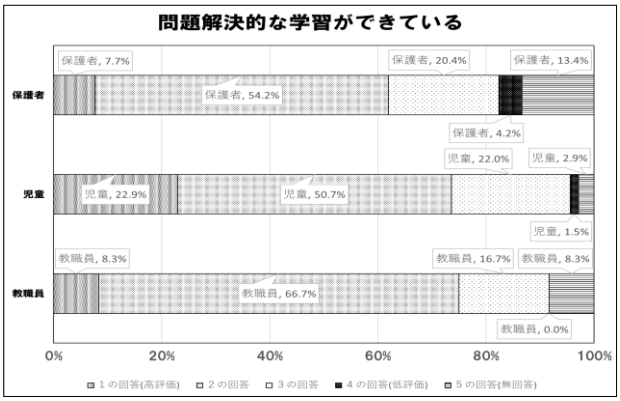
早春の候、保護者の皆様にはご健勝にてお過ごしのこととお喜び申しあげます。令和5年度の学校生活も、残すところ一か月となりました。今、子どもたちは進学、進級というそれぞれの次のステージに向けて、この一年間のまとめに取り組んでいるところです。

さて、年末に行いました「学校評価アンケート」では、「142名」の保護者の方からの回答をいただきました。このアンケートは保護者や地域のみなさんと一緒に子どもたちを育てていくための大変貴重なご意見をいただける機会です。また、今年度も ICT 機器を活用し、児童へもアンケートを実施しました。この資料には「保護者、児童、教職員」の三者が回答したアンケートの結果のみを記していますが、保護者の皆様はもちろん、学校の主役である児童の意見も分析しながら、令和6年度のよりよい希望ケ丘小学校の学校運営に生かしていきたいと考えています。学校評価アンケートは毎年年末のご多用な時期の実施となりますが、今後もご協力をお願いいたします。

【教職員・保護者・児童の３者が評価した項目について】





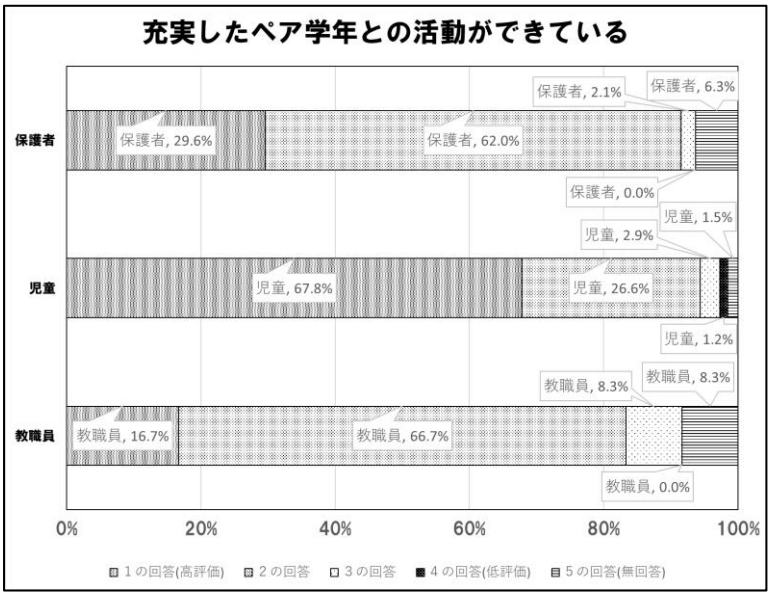


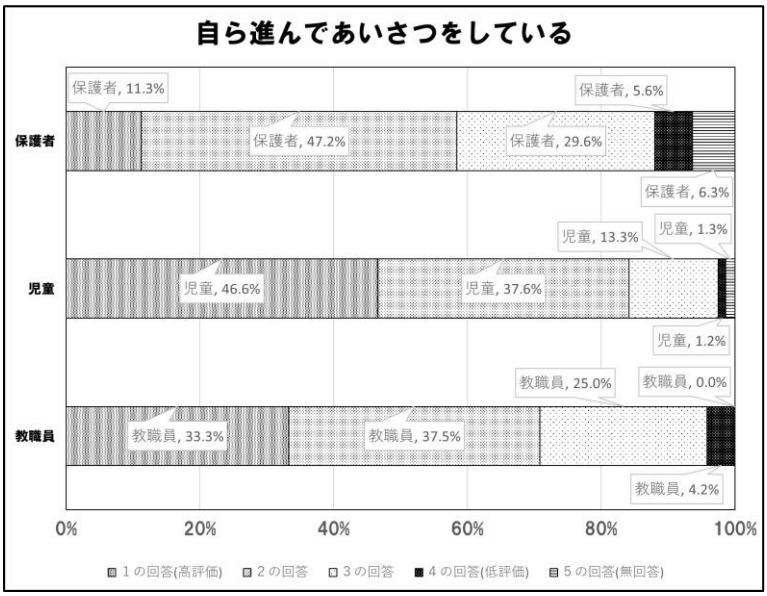
【学習指導】

保護者と児童は、「とてもそう思う」「そう思う」が多かった。特に「基礎基本」に関する質問では多かった。

一方で、「見通しをもった」「問題解決的な」学習に関する質問においては、教職員の意識の高さに比べて、保護者と児童の実感は低い。

児童の回答も含めて考察すると、教師が授業力を向上させていくとともに、子どもたち自身が見通しをもち問題を解決していく過程を、より丁寧に指導し、見通しや問題解決について価値付けしていくことが必要だと考える。また、保護者の方のご意見であったように「子どもたちが楽しく興味をもつような方法」を授業のなかで模索していく必要がある。さらに、子どもたち自身が身に付いた力を自覚できるよう、学習の振り返りの場面をしっかり確保していくことが大切になる。

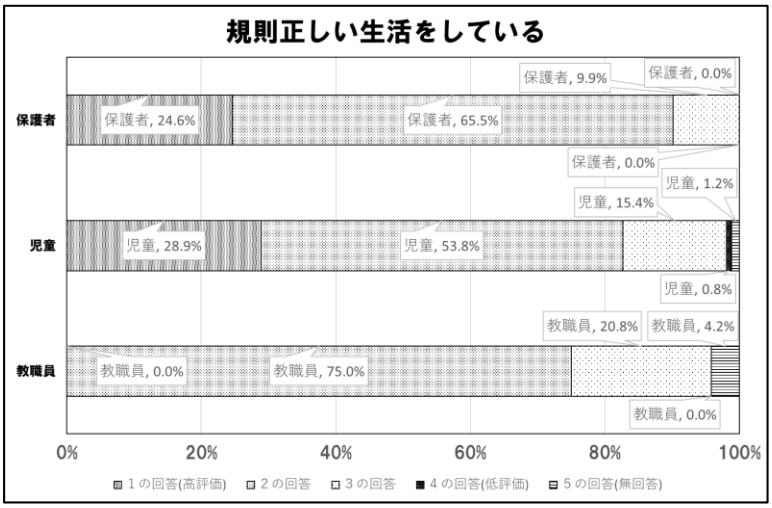


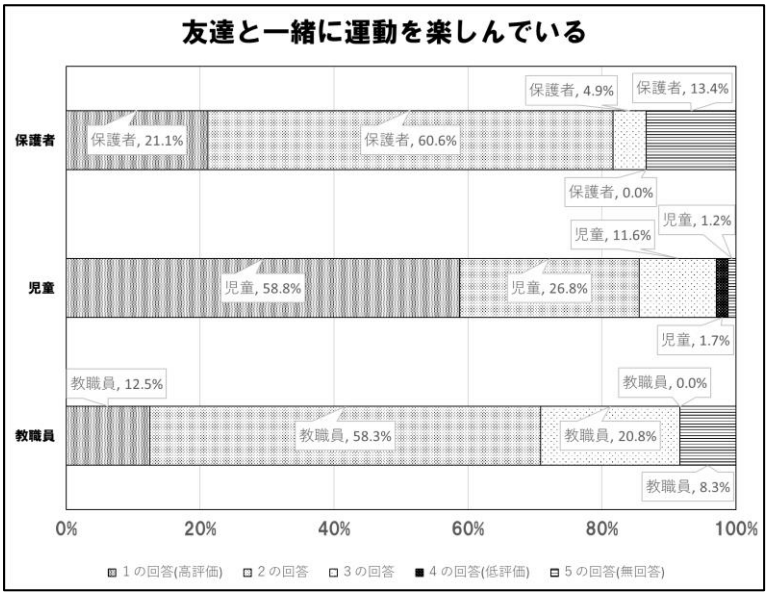


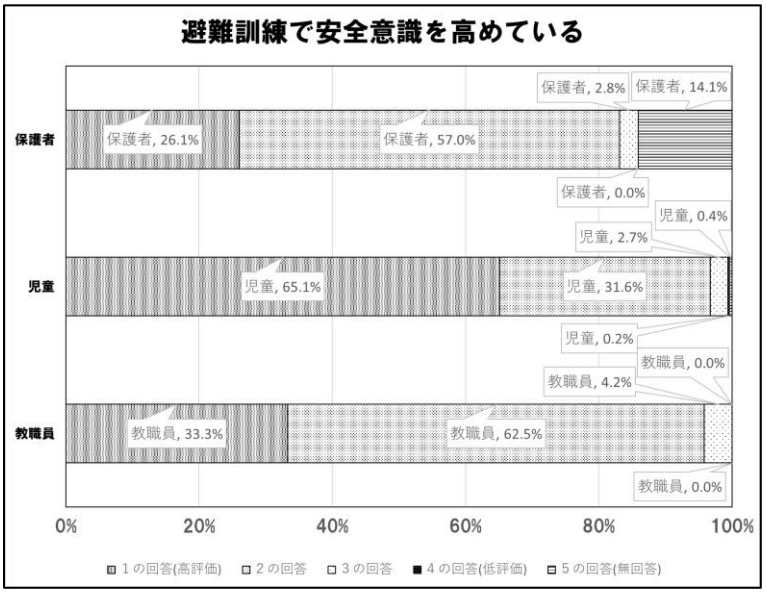
【道徳教育/人権教育】

ペア活動においては、三者の評価結果から充実していることが分かる。特に子どもたちの「とてもそう思う」が多く、交流が子どもたちの豊かな心の育成につながっていると考えられる。本校の柱として、今後もペアとのつながりを大切にしていきたい。

本校の継続的な課題として、あいさつをすることが挙げられる。毎年、委員会を中心にあいさつ運動を行なっているが、「地域」や「登下校中」でのあいさつが特に少ないとの声がアンケートの記述からも分かる。児童の評価が昨年度よりわずかではあるが上がっているところを前向きに捉え、あいさつのよさを実感できるように働きかけていき、家庭や地域の方々と一緒に、子どもたちの意識を変えていく必要がある。





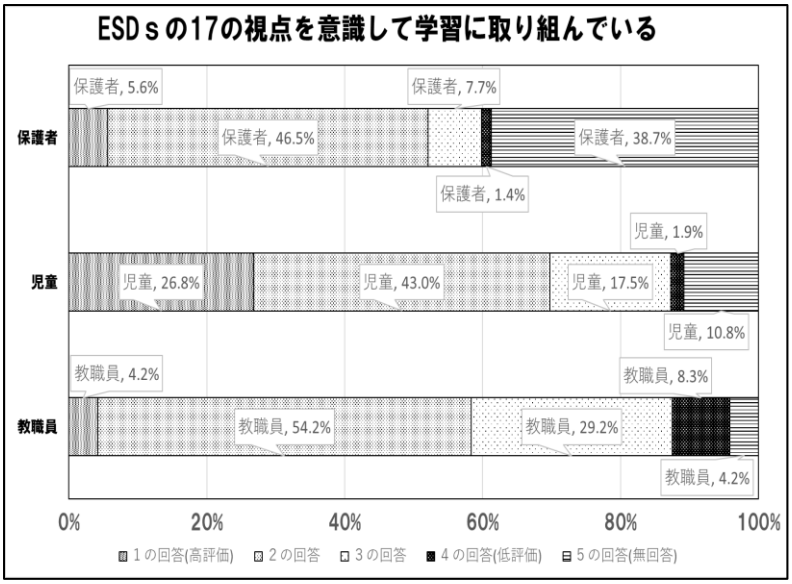


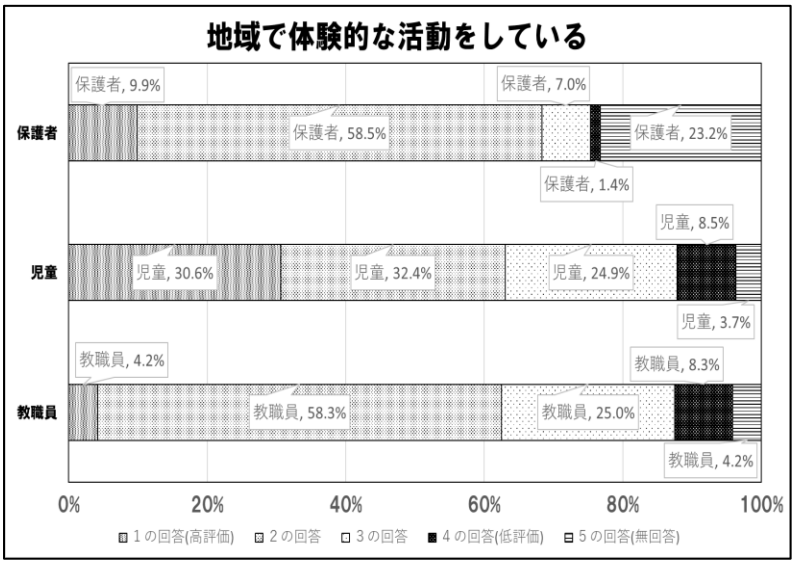
【健康・食育・安全教育】

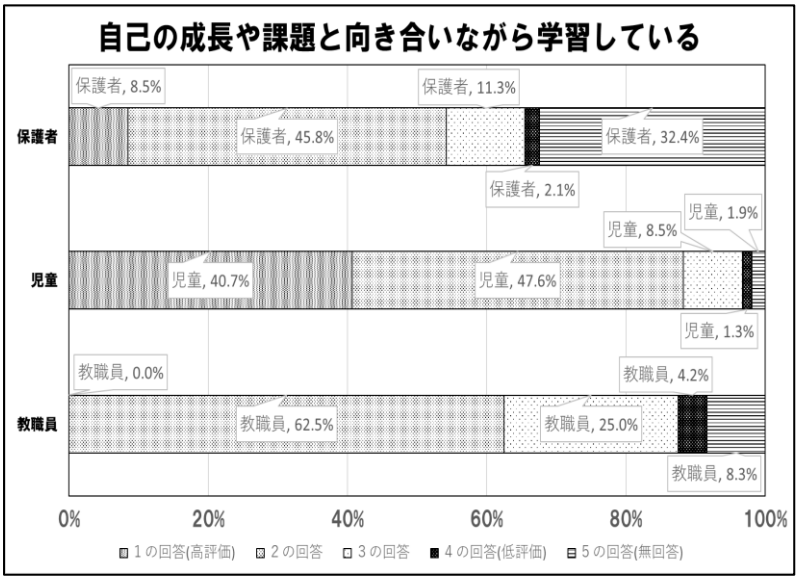
ほとんどの児童が、規則正しい生活をできているようだが、児童や教職員の結果の中には「あまりそう思わない」「そう思わない」という回答が一定数ある。なかには、寝不足で学校でも眠くなってしまったり、体調を崩してしまったりする姿も見られる。規則正しい生活をすることのよさを継続して指導していく必要がある。「規則正しい生活」が、毎日同じ時刻に就寝などをするだけではなく、その就寝時刻自体を見直す必要がないかを、学習場面を含めて指導していきたいと考えている。ぜひ、保護者の方もご協力いただけるとありがたいと考えている。

休み時間、外遊びをする児童は多い。学年が進むにつれ、外に出て遊ばなくなる傾向はあるので、体を動かすことの気持ちよさを実感できる機会をつくり、運動の興味がもてるようにしていく。

避難訓練は、様々な状況を想定して毎月実施している。火災、地震、特別教室、休み時間、予告なし等。子どもたちは、状況に応じて避難の仕方を学んでいる。また、実際に地震があった時も、声をかけ合い、自主的に避難する姿も見られる。訓練を継続し、「自分の命は自分で守る」意識を高めていく。







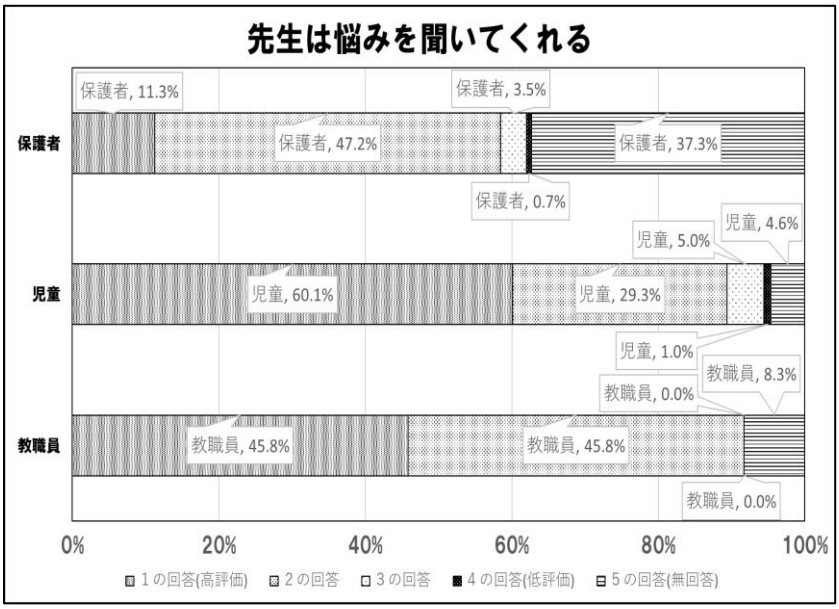
【ＥＳＤ/ＳＤＧｓ】

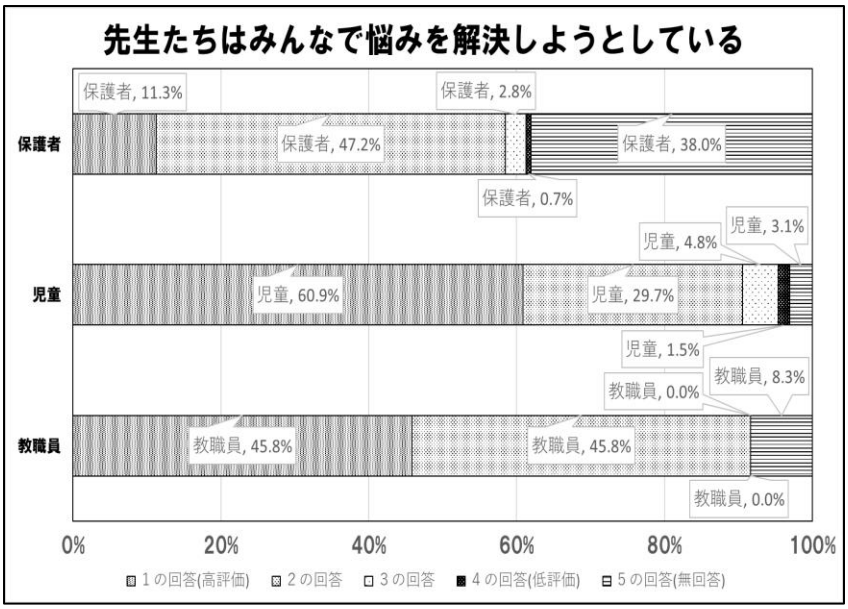
「17 の視点」は、学年に応じて指導の仕方が異なるとは言え、「17 の視点」と「学習の関連」を教師が意識することと同時に、子どもたちにも意識させることが大事だと考える。

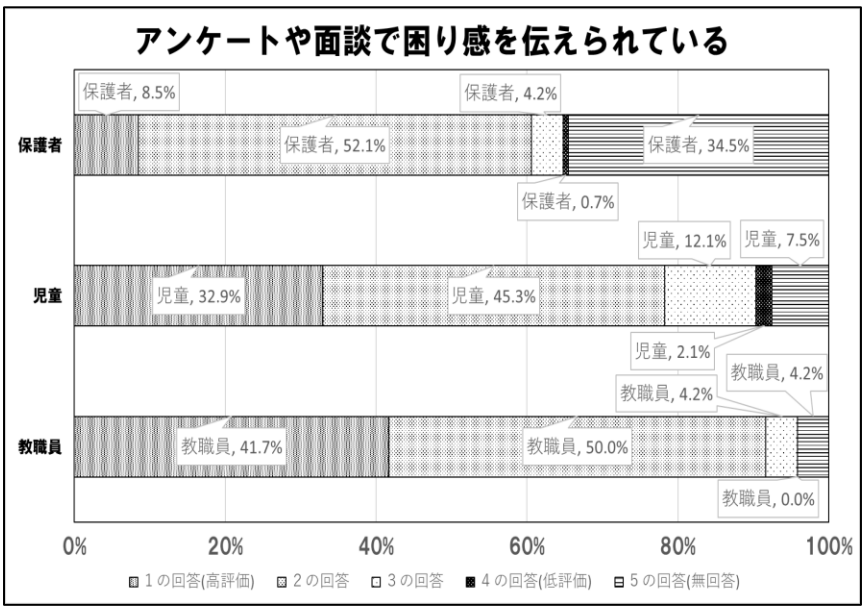
地域での体験的な活動においては、三者とも「あまりそう思わない」「そう思わない」を回答した人数が多い。児童においては 3 割ほどいる。コロナ禍で、一度ストップしてしまった活動もある。「希望が丘にいる方々の貴重な材」と「学習」との関連を見直し、時数削減の中でも充実した活動を考えていくことが必要である。

保護者と教職員の中では、評価が高くないが、児童においては評価が高かったのが、キャリア教育についてであった。子どもたちなりに、自分の成長や課題を振り返りながら次の目標に進んでいるのかもしれない。教職員はこのことを自覚し、子どもたちの意欲に寄り添いながら学習を組み立てていくことが大切である。

また、それぞれの活動が保護者にも伝わるように、学習の展開を工夫したり、ホームページや学校だよりを通じてお知らせしたりすることも必要になる。



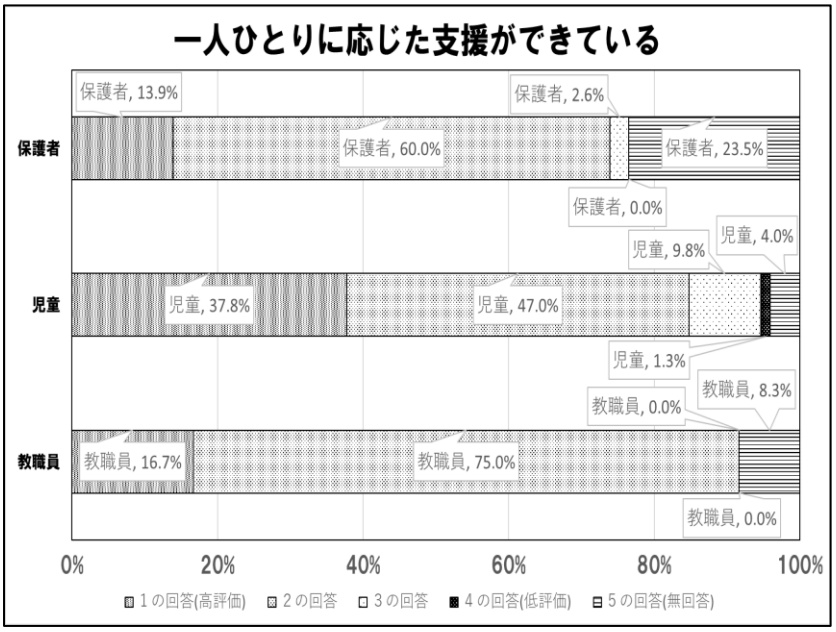




【いじめ対応】

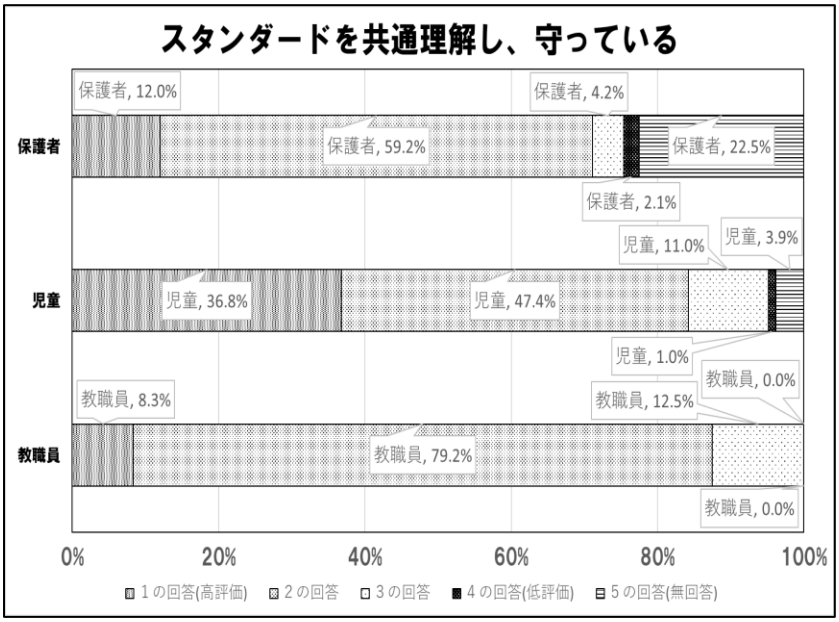
保護者評価で「分からない」の回答が多い項目であった。また、児童と共に「どちらかというとそう思わない」「そう思わない」の回答も多い。一方で保護者の方からのご意見として「いじめについて迅速に対応している」との意見も多数いただいた。

横浜市一斉の取組として、「生活についてのアンケート」「いじめ防止のためのアンケート」を実施し、児童と面談をしている。心に抱える悩みを聞いたり、子どもたちの声から問題を解決したりと、一人ひとりが安心して学校に通うことができるよう努めている。一方で、なかには直接話すことに抵抗や不安を感じている児童もいる。保護者からの情報も、貴重な解決策となる。一人で抱えこまぬよう、担任だけでなく、学年の教員、養護教諭、児童支援専任、スクールカウンセラー、ソーシャルスキルワーカーなど、相談できる相手がたくさんいるということを伝えていくことを大切にしていく。また、相談されたら必ず助けるという姿勢を示し実行していくことが、子どもたちの安心につながると考える。子どもたちの安心感が、同時に保護者の安心感にもつながる。



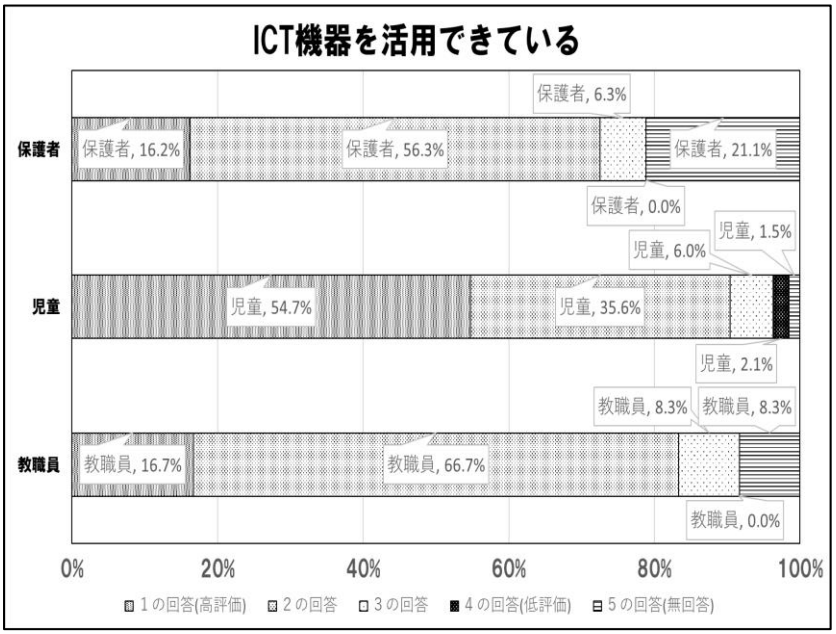
【特別支援教育】

保護者や児童の「あまりそう思わない」「思わない」という回答がいることから、個々に応じた支援ができているとは言い切れない。教職員はこの現状をしっかり認識し、場面や内容に応じて支援が必要な児童に対し、細やかな配慮ができるよう、家庭と学校が密に連絡を取り合う必要がある。また、保護者からのご意見でもあるように、特別支援教育の内容についての発信を努めていく。



【児童生徒指導】

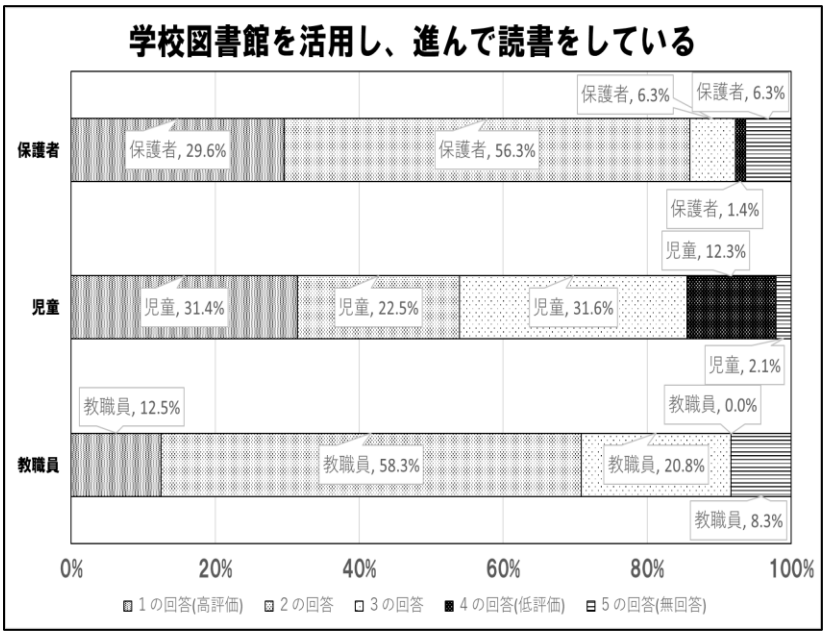
児童と教職員に「あまりそう思わない」という回答が多いところを改善する必要がある。改めて、スタンダードの中身について見直しをしたり、共通理解をしたりすることが必要になる。また、内容を子どもたちと共に定期的に確認していかなければならない。

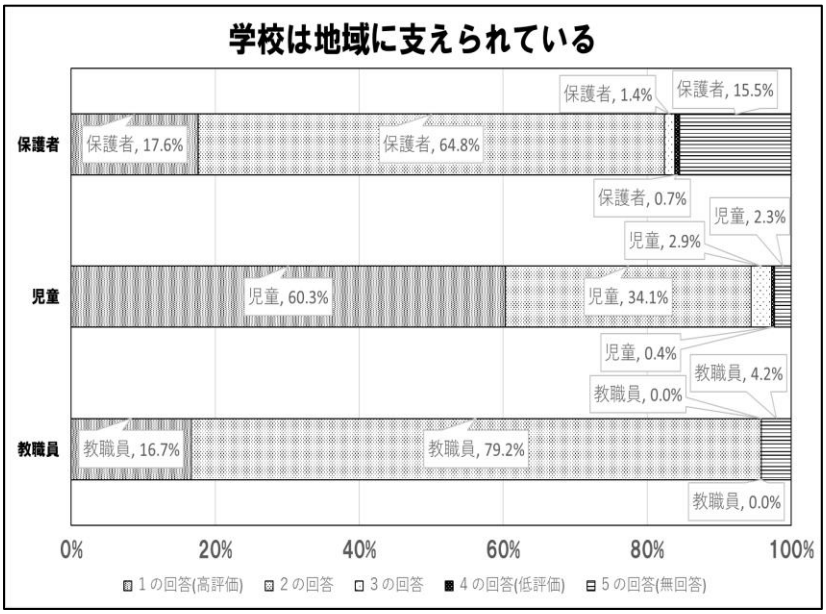


【情報教育】

ICT 機器の効果的な活用のために、職員研修を行い、日々の授業で生かすよう努めている。保護者の「とてもそう思う」「そう思う」の回答が去年と比べて増えていることから、子どもたちの活用の様子が家庭に伝わっていることが分かる。

学校図書館の利用に関しては、全体的に評価が下がっている。保護者ボランティア（ブックルズ）による読み聞かせなど、学年に関係なく本に親しむ時間の確保が大切である。





【地域学校協働】

地域の方々に支えていただいていることを実感している児童が多い。自分が住んでいる地域の方は勿論、地域の見守り隊の方々、学習サポーターの方々、生活科や社会科、総合的な学習の時間に関わっていただいている方々との出会い方や関わり方、活動の終わり方などを子どもたちと丁寧に話し合い、子どもたち自身が感謝の気持ちをもてるようにしていく。